

場を含む文法

河原 修一

岡山理科大学教育学部中等教育学科

(二〇一六年一月三十一日受付、二〇一六年二月五日受理)

個人の意識に内在する枠組としての言語は、社会的な約束に基づく記号体系として、その時点で普遍性をもち、見えないもの(聞えないもの)であるが、弾力的な鋳型のように、様々な言語表象を生成する。言語表象には、内的言語表象(以下、「内言」と略す)と外的言語表象(以下、「外言」と略す)すなわち言語表現とがある。内言はこころのなかのことであり、外言は身のそのことば(話しことば、書きことば)である。

建物のプラン(イメージ)は頭のなかにあるが、実際の建物は地面に建っている(まわりの具体的な環境のなかにある)ように、言語は抽象的であるが、言語表象は具体的な場、脈絡(時間的な前後関係など)、状況(以下、「場」または「脈絡」と総称する)のなかにある。

場(脈絡、状況)には、場面的脈絡、心理的脈絡、文化的脈絡がある(注1)。

内言、独言、文章は心理的脈絡と関連し、談話は心理的脈絡および場面的脈絡と関連し、いずれも無意識に文化的脈絡と関連する。

枠組としての言語をモデルとして、個人が場のなかで様々な言語表象をなすが、共通しながらも同一ではなく、それぞれ差異がある。

内言は他者には見えないもの(聞えないもの)であるが、自分(本人)には心象(心像)として知覚(自覚)できるものである。

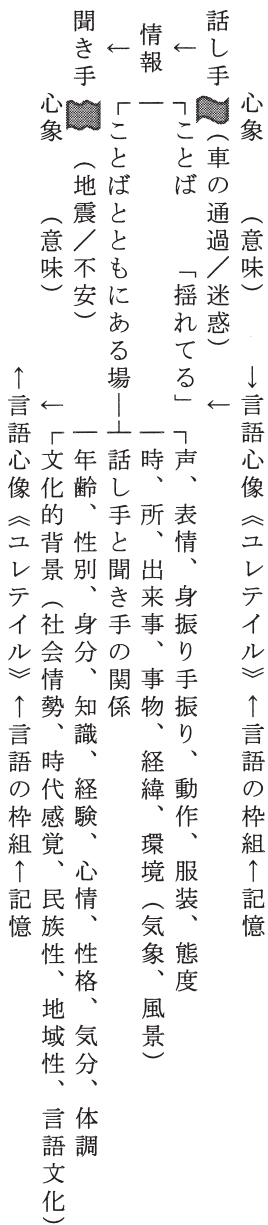
外言すなわち言語表現は他者にも自分にも見えるもの(聞えるもの)であり、具体的な心象となつたものである。

言語と言語表象(内言と外言)とは、言語事象として一体であるが、それぞれ次元が異なる。

言語による意思の伝達(以下、「言語伝達」と略す)は、言語表現に含まれる。言語表現は独言や日記もありうるが、言語伝達では、言語主体として、表現者だけでなく受容者が必要とするから、表現者は伝達者でもある。言語表現における素材は、言語伝達における情報でもある。

情報には、言語表示における論理脈絡による情報と、言語表示とともにある(話し手・聞き手を含む広義の)場による情報とがある。

談話における言語伝達(会話)を例として、ことばと場の関係を簡略に図示する。



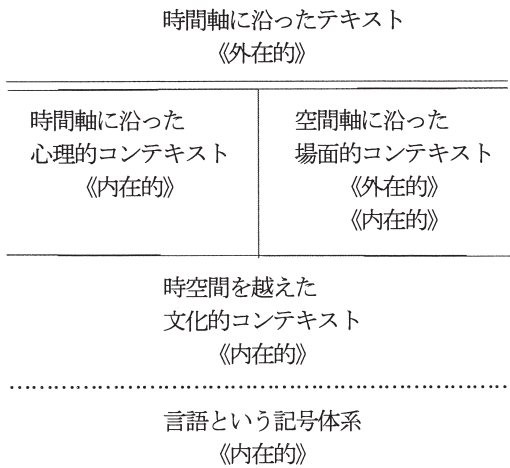
〔図 1〕

場の要素として、話し手と聞き手に付随する声、表情、身振り手振り、動作、服装、態度、年齢、性別、身分(職業)、知識、経験、心情、性格、気分、体調があり、話し手と聞き手の(社会的、心理的な)関係(の変化)があり、時、所、出来事(事件、行事)、事物(の配置)、

経緯、環境（気象、風景）があり、文化的背景（社会情勢、時代感覚、民族性、地域性、言語文化）がある。ことば（言語、言語表象）は各個人の記憶のなかの言語の枠組（連語のつながりかたを含む）に支えられているが、暗示的表現（婉曲、ユーモア、象徴などの表現）、嘘、レトリック、慣用語、ことわざ、挨拶語、位相語（敬語、方言、流行語、男性語・女性語など）などの言語文化にも支えられている。実際にことばの発せられる場面（場の断面）で、心理的脈絡、場面的脈絡、文化的脈絡および言語論理脈絡（言語の枠組）は複雑に絡み合っている。「図1」で、話し手と聞き手は同じ部屋にいて、振動が心象としてうつされる。話し手は、車の通過による振動の心象を迷惑という意味でとらえ、言語心像（構成的聴覚心像）《ユレテイル》をつくる。かつて騒音に悩まされた経験を思い出しながら、眉根を蹙め、身振り手振りでも「揺れてる」と聞き手に話しかけながら、同意を求める。聞き手は、かつて震災に遭った経験を思い出しながら、心配性という性格とも相俟って気が悪くなり、話し手の表情、身振り手振りや発話に対して、同じ言語心像《ユレテイル》をつくるが、振動の心象を地震の心象として不安という意味でとらえる。同じ言語論理脈絡であっても、場の要素に応じて、話し手と聞き手は相互理解に至るとは限らず、誤解が生じることもある。

場の要素を脈絡として、簡略に分類する。

- A 時間軸に沿った（目に見えない）内在的な心理的脈絡：線状的（連続的、断続的）な脈絡
- A 1 言語表現以前の無意識的、意識的な心象（感覚、印象、知覚、感情、思考、想像、想起、直観など）、定型的心象（観念）
- A 2 言語表現に向かう動機・志向・意図などの心象または観念
- A 3 概念（社会的心象）の組合せ
- A 4 発話前の予備的内言
 - 連想可能性（語彙）と連結可能性（文法）による（接続する）語の選択・決定
 - ：心象（観念を含む）と概念との葛藤のプロセス
- A 5 発話中の並行的内言
 - 自意識による表現の適否の判断・評価
 - 連想可能性の枠組からのずらしによる暗示表現、レトリック、詩的象徴などの工夫
- A 6 発話後の余韻的内言
 - 話し手の自意識や聞き手の反応による余韻的な感情の加わった評価
- A 7 聞き手による話し手の意識的、無意識的な意味（意図）のよみとり
 - 言語論理脈絡と場のよみとりによる解釈・類推・洞察
- A 8 聞き手の評価的感情
 - 意味（意図）の理解による共感、誤解による反感または失意
 - 悪意の理解による反感または失意、誤解による喜び
 - 意味（意図）がよみとれないことによる当惑
- A 9 心理的脈絡の経緯（いきさつ）による話し手と聞き手の心理的な関係（親疎）
- B 空間軸に沿った場面的脈絡：広がり（面）としての網目状の脈絡
- B 1 話し手・聞き手に付随する目に見える（耳に聞こえる）外在的な場の要素
 - 音声（言語音、表情音）、表情、身振り手振り（慣習的なもの、個人的な癖）、動作、動作音、身なり（服装、髪型）、態度
- B 2 話し手・聞き手に付随する（認知されている）社会的な場の要素
 - 年齢、性別、身分、階層、職業（役職を含む）



〔図2〕

言語表示における脈絡（テキスト）、場における脈絡（コンテキスト）、言語の枠組（記号体系）の関係を簡略に図示する。

B3 話し手と聞き手の社会的な関係（地位、長幼、血縁、利害など）
 B4 話し手・聞き手に付随する（目に見えない）内在的な場の要素
 語彙、文法、言語的位相（敬語、流行語、方言など）、学識、教養、常識などの知識・理解、生活経験の蓄積
 知能・判断力、想像力、感受性、性格、価値観（信念）、趣味、習慣、体調、気分
 B5 話し手と聞き手をめぐる発話時の（認知されている）場面（現場）の要素
 季節、時刻、場所、環境（事物の配置、風景、気象）、行事（式典、文化祭、運動会、講演会、観光旅行など）、社会的な事件（災害、事故）、個人的な出来事（恋愛、喧嘩）、事件（出来事）の契機・経緯・影響
 C 時空間を越えた（目に見えない）内在的な文化的脈絡：ふくらみ（立体）としての（奥行きのある網目状の）脈絡
 C1 時代背景：時代の流行をなす生活様式（ファッション）・文化現象
 生活感情（生業、遊び、嗜好、芸能、スポーツ）
 美意識（芸術、デザイン）
 価値観（思想、道徳、宗教）
 C2 民族的通念：時代の流行に関わらない民族精神・生活形式
 儀礼（儀式、祭礼、作法）、習俗（慣習、風俗）
 生計手段（農耕、牧畜、狩猟、漁労）に基づく生活形態
 風土（気候、地形）による地域性
 C3 文化的象徴体系、文化的記号体系、言語の枠組
 言語文化（語感、暗示、婉曲、ユーモア、嘘、レトリック、慣用句、諺、挨拶語、敬語、方言、流行語、男性語・女性語など）

ことばは場のなかで意味をもつ。談話では、場の関与が大きい。文章では、場をことばで説明する。

場を含む文法が必要となるのは、談話表現、一語文（表出文、名詞文、動詞文、形容詞文）、「だ」で終る主客一体の表現、省略表現、婉曲表現、逆説表現、反語表現、待遇表現、挨拶表現などである。日本語では待遇法のうちの敬語法が発達していて、構文にも関わってくる（注2）。

場を含む文法として、心象文法がある（注3）。

談話表現で、「今度、一緒に話をしませんか」という誘いかけに対して、「いいよ」という同じ言語表示で答えるとき、場に応じて、イエスにもノーにもなる。

やわらかい声で、ほほえみ、両方の掌を上にして、頷きながら言うとき、共感的同意を示す。やや上昇調の音調（イントネーション）となる。話し手と聞き手の心理的関係は、親密である。

とげとげしい声で、眉根を吊り上げ、両方の掌を前に押し出し、顔を背けながら言うとき、反感的拒絶を示す。下降調の音調（イントネーション）となる。話し手は聞き手に対して、親密な感情を抱いていない経験（経緯）がある。

「結構」という漢語が鎌倉時代に《建物の構造》という意味で伝わってから、江戸時代に《細工物の仕組み》、明治時代に《文章の構成》という意味も加わり、近代には《すぐれた計画》、現代では《よい考え》という意味となる。「結構です」（よい考えです。大賛成です。）は、共感的同意を示し、やや上昇調の音調となる。「結構です」（よい考えですが、賛成いたしかねます。）は、反感的拒絶を示し、下降調の音調となる。「結構」の本義を考えると、後者は日本人らしい気遣いによる婉曲的な断りであることがわかる。話し手と聞き手の心理的関係は、「いいよ」と同様の構造になっている。日本列島、琉球列島で農耕を主な生計手段としてきた生活形式によって、協調性を重んじる民族精神が培われてきた文化的脈絡が窺われる。

談話表現では、話し手と聞き手の関係は、終助詞（文末で情緒を示しながら聞き手に働きかける助詞）で示される。以下、作例を示す。

- 1 花が咲いているわ。
（話題の提示、女性語）
- 2 花が咲いているぞ。
（話題の強調、男性語）
- 3 いい景色だなあ。ひどいなあ。
（感動・詠嘆の表出）
- 4 a 火事があったよ。
（報告）
b 公園に出かけようよ。
（誘いかけ）
c さあ、行くよ。
（促し）
- 5 a そうね。そうだね。
（同意、女性語、男性語）
b 面白かったね。
（同意の求め）
c 公園に出かけようね。
（同意を求めながらの誘いかけ）
- 6 a 風が吹くの。
（情趣、女性語）（下降音調）
b 風が吹くの？
（疑問、女性語）（上昇音調）

いずれも、話し手と聞き手の心理的関係は、親密である。敬語として丁寧語を付加すれば（1、2、4、5c、6aは「ます」、3、5a、5b、6は「です」）、場に応じて、丁寧、遠慮、気取りなどの待遇的な意味が添えられる。

1、2、5、6では、終助詞によって、話し手の性別や長幼を示す。

6では、文末の音調（イントネーション）によって、平叙文にも疑問文にもなる。

1、3、6aでは、聞き手への働きかけは弱く（1、3では無意識的な表出に近く、6aでは無意識的な甘えを含み）、2、4、6bでは聞き手への働きかけは強く（聞き手への配慮は2ではほとんどなく、4では多少あり、6bでは多少ありながら無意識的な甘えを含み）、5では

聞き手への働きかけは強く、配慮もある。

5では、協調性を重んじる民族精神が培われてきた文化的脈絡が窺われる。

4、5では、それぞれ場に応じて、表現的意味が異なるが、基本的には「よ」は報告、「ね」は共感を示す。

談話表現では、話し手も聞き手も同じ場において、脈絡(前後関係)もわかっているのので、一語文がよく現れる。一語文には、表出文、(もの)文(名詞文)、(こと)文(動詞文)、(さま)文(形容詞文、形容動詞文)がある。一語に修飾語(連体詞・副詞)が前接したり、関係語(助動詞的連語・助動詞・助詞)が後接したりする文も、一語文に含める。以下、作例を示す。

1 ああ。まあ。ほら。ねえ。ええ。いやだ。(表出文、感嘆、呼びかけ、応答)

2 花。花だ。花よ。あ、花だ。(名詞文)

3 咲く。咲いた。咲いたね。たくさん咲いた。(動詞文)

4 赤い。赤いよ。とても赤いよ。(形容詞文)

5 きれいだ。きれいよ。きれいね。きれいだなあ。(形容動詞文)

以下、実例(場、時、所、発話者)および構文を示す。

1 「帽子、忘れちゃいけないよ」(二〇一六、二、三(水)午前九時頃)

(JR吉備線列車内、下車する時、六〇代女性↓六〇代男性)

補語・動詞文

「関係語

2 「ちよつと遠いんだよ。それで、かなり手が動いちやう」(二〇一六、九、二〇(火)夕刻)

(岡山理科大学玄関前、二人の男子学生)

修飾語

形容詞文

「関係語

、接続語、補語・動詞文

「関係語

3 a 「木目がすごいな」

b 「大きいでえ」

(二〇一六、三、五(土)午後)

(総社市中央公民館、鳥城彫展示場で、二人の初老女性)

a 補語・形容詞文(感動、評価)

「関係語

b 形容詞文(程度)

「関係語

4 a 「おもしろえわあ、この松の木が。動きが楽しいが」

b 「梅じゃが」

(二〇一六、三、五(土)午後)

- a 形容詞文 補語 (総社市中央公民館、鳥城彫展示場で、二人の初老女性)
 「関係語」「倒置」 補語・形容詞文
 「関係語」
- b 名詞文 「関係語」

1では、「帽子」が話題のポイント(題目)になっている。聞き手に注意を促している。話し手がこころのなかの「帽子」の心象を伝え、聞き手のこころのなかに「帽子」の心象を再現(再構成)させている。「よ」は親密な人間関係での思いやり、忠告を示す。
 2では、話し手と聞き手には、脈絡(前後関係)がわかっているが、第三者には話題が(実験のことか、アルバイトのことか、ゲームのことか)わからない。「よ」は親密な人間関係での報告を示す。
 3では、「な」は親密な人間関係での率直な感動を示す。「でえ」は「ぞ」(共通語)に相当する方言で、親密な人間関係での強めを示す。
 4では、「わあ」は親密な人間関係での題目についての感動を示す。「動きが楽しいが」「梅じゃが」の「が」(終助詞)は方言で、親密な人間関係での問いかける気持ちでの同意の求め、念押しを示す。
 名詞文に助動詞「だ」(または終助詞「よ」「ね」(女性語))の付加した主客一体の表現がある。作例(場)および構文を示す。

1 海だ。(山を下ってきて、突然海岸に出たとき)

素材語・関係語

2 明日から夏休みだ。(学童達の会話)

素材語・素材語・関係語

3 ぼくはうなぎだ。(食堂での注文/好きな食べ物/嫌いな食べ物/魚釣り/学芸会での役割)

素材語・素材語・関係語

4 a 風が吹くことだ。

b 風が吹くのだ。

文・形式名詞(または準体助詞)・関係語

1では、「海」という素材が話し手の心象に映じて、対象化しないままに表出した主客一体の表現となっている。「海がある」「海が波立っている」「海が青い」「海は広い」「海はすばらしい」などは、素材を対象として分析しているが、1では、未分化なままに主体の想い(感動)が素材と直結して、表出する。

2では、「明日から夏休みが始まる」という文の要素を素材として、語順はそのままに截りとして、表出する。主体をめぐる状況と主体の想い(喜び)が一体となる。

3では、場に依りて、「ぼくはうなぎが食べたい」「ぼくはうなぎが好きだ」「ぼくはうなぎを釣った」「ぼくはうなぎの役をする」などの文の要素を素材として、語順はそのままに截りとして、表出する。主体をめぐる状況と主体の想いが一体となる。相手が何か訊かれて、簡潔に答える。話し手と聞き手は話題を共有しているので、意味が通じる。食堂で店員(または同席者)から注文(また

は食べたいもの)を訊かれて、あるいは好きな食べ物、嫌いな食べ物、釣った魚、学芸会での役割について複数の人と話し合っているときに訊かれて、「ぼくは」とほかの人と区別して答える。話の成り行きで、話題のポイントはすでにわかっているから、必要なところだけ切り取って、「だ」でまとめる。女性は「わたしはうなぎよ」「わたしはうなぎね」と、「よ」「ね」でまとめる。日本語には、場に依存した表現がある(注4)。日本人の間では、日本列島・琉球列島で概ね生活形式を共有してきたので、場の要素が大きい。

4では、主体をめぐる状況が文で表され、文末の連体形に「こと」(形式名詞)「の」(準体助詞)などが接続し、体言化して素材とし、「だ」でまとめる。主体をめぐる状況と主体の想い(感慨、情趣、意思など)とが一体化して、表出する。ただし、「くことよ」は女性語ではなく、やや古めかしい気取った表現となる。

談話表現では、話し手も聞き手も同じ場において、脈絡(前後関係)もわかっているから、省略表現がよく現れる。

「どうぞ」は、「どうぞお入りください」「どうぞお座りください」「どうぞお話してください」などの下略形である。声の調子、表情、身振り手振り、動作などの場の要素と協働して用いられることが多い。「どうぞ」「どうぞお先に」「お先にどうぞ」なども、「どうぞお先にお通りください」「どうぞお先にお話してください」「お先にどうぞお通ってください」「お先にどうぞお話してください」などの下略形である。同様に、

「どうも」は、「どうも有難うございます」「どうもすみません」「どうもうまくいきません」などの下略形である。感謝、謝罪、婉曲的な断りなどの表現的意味となる。場の要素と協働して用いられることが多い。

「ちよつと」は、「ちよつと待ってください」「ちよつとお話があります」「ちよつと困ります」「ちよつとひどいと思います」「ちよつと私どもの店では置いていません」などの下略形である。程度を本義として、呼び止め、呼びかけ、迷惑、抗議、婉曲的な断りなどの表現的意味となる。場の要素と協働して用いられることが多い。

いずれも、日本人の間で概ね生活形式を共有していることによる場に依存した表現である。

談話表現では、協調性を重んじる農耕民族の性向によって、言い切りによる断定表現を避ける婉曲表現がよく現れる。

「雨が降ってきたみたい」という婉曲表現は、話し手も聞き手も場(気象の変化)はわかっているが、「雨が降ってきた」という断定的な表現を避ける。言外に、「洗濯物を入れなくちゃ」「そろそろ話をやめて、お暇します」などの意思を暗示する。

暗示表現は、場に応じて、ユーモア、諧謔、揶揄、皮肉、お世辞、嘘などの表現となる。哲学、宗教、芸術などについての談話表現、文章表現(哲学的エッセー、詩、小説など)では、比喻表現、精神的象徴表現となる。

逆説表現では、矛盾した表現のように見えながら真実を衝く人生経験の知恵が示される。各個人の生活経験の蓄積という目に見えない場の要素との協働によって成り立つ。「急がば回れ」ということわざには、集合的な生活経験の知恵が示され、共感され理解される。

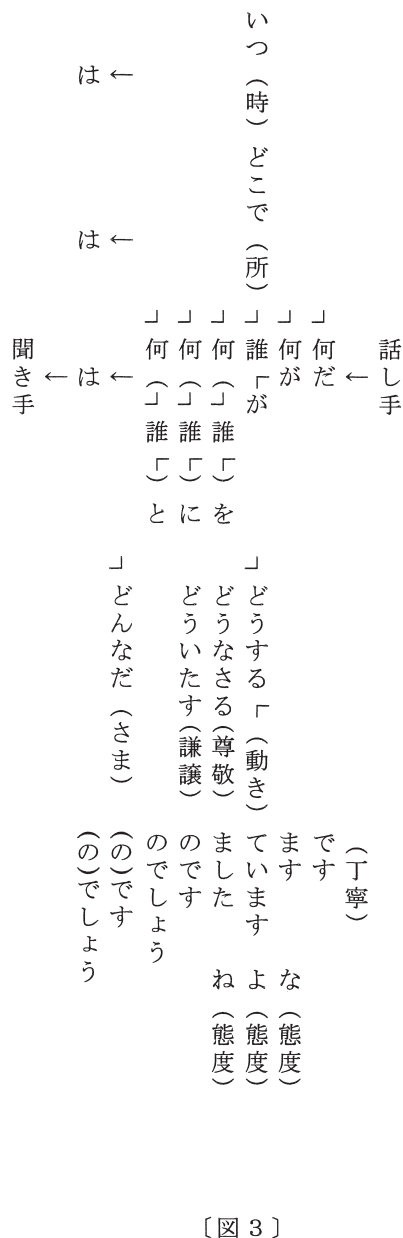
反語表現では、疑問表現の形でありながら、場(脈絡)によって、反転する真意が聞き手(読み手)に了解される。洞察が求められる(前提とされる)。「行かないんですか」という反語表現には、「あなたは行くべきです」という真意が隠されている。

待遇表現は、人間関係(身分、階層、長幼、親疎、利害、評価、内外など)の言語的反映である。待遇表現は、場と協働して、待遇の意味となる。

待遇は、人間関係における言動による扱いである。訪問客に属する場の要素には、服装(普段着か礼装か、帽子・コートの着脱)、持参する物(手ぶらか手土産か進物か)、来訪の目的(ついでかわざわざか)などがある。訪問客を迎える主に属する場の要素には、場所(玄関先か茶の間か客間か)、誘導(先導か並進か随行か)、動作(立つか座るか)、もてなし(茶菓か酒食か)などがある。主と訪問客に属する場の要素には、声の調子、表情、身振り手振り(腕組みか握手か揉み手か)、言動(無言か会釈かお辞儀か挨拶語か)、人間関係、文化的背景(日本人の民族性、地域の習俗、時代背景など)などがある。

日本人は、定着農耕という集団の作業(田植え、刈入れなど)を生活形式とする同質社会のなかでの人間関係に気を遣う民族として、待遇表現のうちの敬語表現を発達させてきた。

敬語表現は、人間関係を円滑にするための敬意を示す表現である。基本的には談話語にあらわれる。文章語では丁寧になる傾向がある。内言、独言、日記にはほとんどあらわれない。
 日本語の構文に、場（脈絡、状況）の捉え方として、待遇（人間関係への配慮）が示される。構文の要素（もの（名詞）、こと（動詞）、さま（形容詞、形容動詞）への接辞（接頭辞、接尾辞）の添加という語法で示される。待遇動詞（尊敬動詞、謙讓動詞）で示されることもある。「だ」「が」「を」「に」「と」などは情報の焦点を示し、「は」は聞き手に題目（話題・主題の眼目）を示す。



[図3]

以下、作例を示す。

- 1 お久しぶりです。
- 2 お邪魔します。
- 3 ようこそいらっしゃいました。
- 4 娘の花子と申します。
- 5 お父さまがお客さまのお子さまをお医者さまにお連れになりました。
- 6 お母さまとお話ししていました。
- 7 お菓子を召し上げ。
- 8 本日は、お忙しいなかお越し頂き、誠に有難うございます。
- 9 お恥ずかしい限りです。

丁寧語は、聞き手への敬意（人格を尊重する気持ち、丁寧な態度）を示す敬語である。現代社会（平等社会）では、対等な人間関係のなかで個人尊重が示される。
 尊敬語は、ある人物への敬意を、その人物のすがたで示す敬語である。謙讓語は、ある人物への敬意を、その人物に対する別の人物のすがたで示す敬語である。いずれも、現代社会では、社会的な関係を承知していること（身分による尊敬ではない）が示される。ある集団（組織）のなかでの人間関係の円滑化をはかり、秩序を保つ。丁寧語を伴って用いられることが多い。単独の尊敬語は目下の者に用いられ、品位を示す。

単独の謙譲語は目下の者に用いられ、尊大な語感がある。

待遇表現（敬語表現）の体系は、形態（語形、構文）、機能、適用に基づく。語形としては、語根に待遇接辞（接頭辞、接尾辞）が前後から添加する複統合型の待遇表現（敬語表現）を基本とする。構文としては、仮定表現、使役表現、可能表現、否定疑問表現、推量表現などが加わることで、間接表現（婉曲表現）となる。間接表現（婉曲表現）は、聞き手の意思を尊重し、人間関係を含む状況に基づき、場の要素（微笑み、お辞儀、服装、贈り物など）と協働して、心理的な隔たり（遠慮）を生み出す。依頼表現では、待遇表現（敬語表現）に授受表現が加わる。定着農耕を主な生計手段としてきた日本人は、人間関係に気を遣い、もののやりとりで神経質になり、授受表現を発達させてきた。複雑な待遇表現（敬語表現）となる。一般的な表現の連鎖の順序および品詞を示す。

仮定表現・授受表現・敬語（尊敬・謙譲・丁寧）表現・可能表現・否定疑問表現・推量表現
使役表現（許可願い）

敬語接頭辞・語根・敬語接頭辞・動詞・補助動詞・敬語助動詞（尊敬・謙譲）
敬語接尾辞・敬語動詞（尊敬・謙譲）・丁寧助動詞・打消助動詞
（お／ご）（様／さん）・授受動詞・使役助動詞・可能動詞・推量助動詞・疑問終助詞

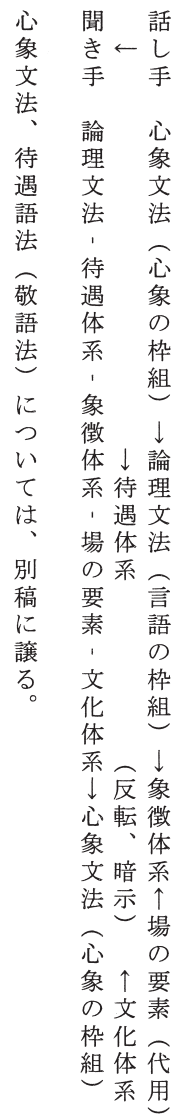
以下、作例を示す。

- 1 仮定表現 尊敬表現
よろしければ、本をお貸し（になつて）下さいません（丁寧推量表現 疑問表現）
か。
- 2 仮定表現 尊敬表現
よろしければ、本をお貸し（になつて）頂けません（丁寧推量表現 疑問表現）
か。
- 3 尊敬表現 謙譲表現
お忙しいところ恐縮ですが、ひと言ご挨拶させて頂けましたら、幸いです。
謙譲表現 使役表現 授受可能謙譲表現 丁寧仮定表現 丁寧表現
- 4 尊敬表現 丁寧表現
お疲れ様です。今後ともよろしくお引き回しのほど、お願い申し上げます。
謙譲表現 謙譲表現 丁寧表現 丁寧表現

挨拶表現は、待遇表現、省略表現と関わる類型的な（パターン化した）表現である。日本人は、定着農耕という集団の作業（田植え、刈入れなど）を生活形式とする同質社会のなかでの人間関係に気を遣う民族として、声の調子、表情、身振り手振り（会釈、お辞儀）などの場の要素と協働して、発達させてきた。人間関係の円滑化を主旨とする。農作業は風土（気候、地形）と密接に関わるので、時候に関する挨拶が多い。「お早う」「こんにちわ」「今晩は」「お先に」「お大事に」はそれぞれ「お早うございます」「こんにちわはお天気はどうでしょうか」「今晩はお仕事が無事すみしましたか」「お先に失礼します」「お大事になさってください」の下略形である。a「どちらにお出かけですか」「今そこまで」という近所での応答は、a「どちらにお出かけですか」b「ちよつとそこまで出かけて来ます」の下略形である。情報のやりとりではなく、人間関係の円滑化を意図している。「頂きます」「ご馳走様」「おやすみなさい」はいずれも歴史的な経緯を含む文化的脈絡に基づいている（注5）。

場とことばの協働として、事情（騒音、周囲の人達への差し障り、話し手が咽喉を痛めて話せないときなど）によって、お辞儀（無言）が「有難うございます」「すみません」「お先に失礼します」などの挨拶語の代用となる。以上述べてきたことを踏まえ、場を含む文法について、簡略に図示する。

[図4]



[図5]

注

- (注1) 河原修一（一九九六）参照。
- (注2) 菊地康人（一九九四）参照。
- (注3) 河原修一（二〇一四）参照。
- (注4) 奥津敬一郎（一九七八）参照。
- (注5) 「頂きます」には古代の稲魂信仰、「馳走」には中世のもてなしが窺われる。「やすむ」は古代の忌詞に由来する。

参考文献

- 1 河原修一（一九九六）「コンテキストの構造と分類」金沢大学国語国文二一号
- 2 菊地康人（一九九四）『敬語』角川書店（一九九七）講談社学術文庫
- 3 河原修一（二〇一四）「日本語心象文法論への試み」金沢大学国語国文三九号
- 4 奥津敬一郎（一九七八）『「ボクハウナギダ」の文法』くろしお出版

JAPANESE GRAMMAR INCLUDING CONTEXT

Shuichi KAWAHARA

Department of Secondary Education,

Faculty of Education,

Okayama University of Science

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 31, 2016; accepted December 5, 2016)

Regarding verbal communication, information consists of text and context. Text depends on unseen verbal system or frame. Context consists of unseen mental element, seen or unseen scenic element, and unseen cultural element including verbal system or frame.

Conversational Japanese reveals simple frames. Some Japanese sentence is made up of some materials in circumstances or situations, adding assistant word “da”. Other materials are fulfilled with context due to mutual imagination, partly common cultural element.

Politeness is expressed by verbal communication and nonverbal communication such as bow, co-operatively. In some cases such as big noises, some inconvenient conditions, or speaker’s inability of utterance, bow without utterance means “Thank you.” “I am sorry.” or “I am going.” On the other hand, Japanese grammar or syntax includes various kinds of politeness. Basic method is polysynthetic structure. Root is surrounded with polite prefix and suffix. The other methods are supposition, possibility, permission, question, suggestion, surmise, and so on.